

芸術家の集う場所

芦屋の美術—近代以降

大槻晃実



1



2



3



4

- 1 小出檜重 アトリエ 1928年
- 2 伊藤継郎 アトリエ 1940年代
- 3 芦屋カメラクラブ 六甲山撮影会 1930年
- 4 トリノへ送る作品を選ぶ吉原治良
芦屋のアトリエ前庭にて1959年
*写真提供：大阪中之島美術館

【参考】
「モダン芦屋クロニクル」パンフレット、
芦屋市立美術館、2015年

六甲山を背景に大阪湾をのぞむ温暖な気候に恵まれた芦屋は、「芦屋」「打出」「三条」「津知」の4つの村からなる、農業や漁業が営まれた地域として、白砂清松とうたわれるのどかな場所でした。明治中頃より私鉄が開通し、駅が開業したことで芦屋は急速に発展していきます。大正初めには、商人の街・大阪と貿易港として栄えた神戸の間に位置する場所として、阪神間を代表する健康地であり、近代都市で働く人々の理想的な住宅地として、人気を博しました。

この頃より芦屋に居を構えた芸術家は多く、幼少の頃に家族と共に転居した者、療養や定住の場として移住した者、知人や親戚をたより転居してきた者など、芦屋へ移るきっかけは様々でした。

明治末より、洋画家として活躍する仲田好江(1902-1995)や抽象絵画のバイオニアとして名を残す長谷川三郎(1906-1957)、作曲家・指揮者・バイオリニストとなる貴志康一(1909-1937)は、幼少期や青年期に家族と共に芦屋へ転居しています。また、西宮・苦楽園から芦屋・六麓荘へ移った日本画家の福田眉仙(1875-1963)、芦屋を拠点に活躍していく吉原治良(1905-1972)や伊藤継郎(1907-1994)が療養のために大阪から移住しました。

一方、洋画家の小出檜重(1887-1931)や上山二郎(1895-1945)、小説家の谷崎潤一郎(1886-1965)が、先に芦屋に居住していた知人をたよって越してきたほか、写真家の中山岩太(1895-1949)やハナヤ勘兵衛(本名・桑田和雄、1903-1991)は、住居を設けるとともにスタジオや写真材料店を開業しています。

このように、明治末から昭和初期にかけて、芦屋の地でたくさんの芸術家たちが居を構えました。中には、アトリエや画塾、研究所を設け、自らの感性や技術を成熟・発展させていくとともに、後進の指導にあたる画家たちがいました。

小出檜重は、大阪から越してきた翌年の1927年に笹川慎一の設計によるアトリエを構え、代表作となる裸婦や静物画を多く生み出したほか、画家を志す若者たちに絵の指導をおこなったり、女性を対象とした絵画教室を開きました。

1932年に完成した伊藤継郎のアトリエでは、デッサン会が開かれたり、画塾が設けられたほか、阪神間において戦禍を免れた数少ない場所として、猪熊弦一郎や小磯良平らが開設した新制作協会の研究所が一時期開かれていました。後に具体美術協会のメンバーとなる白髪一雄や村上三郎も、伊藤のもとに通っています。

一方、洋画家の赤松麟作(1878-1953)、宇和川通諭(1877-1942)、櫻井忠剛(1867-1934)が開いた「芦屋婦人洋画研究会(阪神婦人洋画研究所)」や吉田喜蔵(1889-1943)主宰の「アシヤ洋画研究所」、藤井二郎(1906-1992)と山本敬輔(1911-1963)の「芦屋美術文化研究所」が芦屋の各所で開設されており、阪神間で洋画を学ぶ層の厚さを窺うことができます。

そして、芦屋の美術の動向として特筆すべきは、1930年に結成した「芦屋カメラクラブ(ACC)」と1954年に結成した「具体美術協会(具体)」の存在です。中山岩太とハナヤ勘兵衛、紅谷吉之助(1898-1946)や高麗清治(1897-1962)らによる「ACC」の活動は、新興写真の運動に大きな功績を残しました。また、吉原治良をリーダーに、阪神間に居住していた若手作家たちを中心に結成された「具体」は、各メンバーが先鋭的な表現の作品を数多く発表し、世界的な評価を受け、戦後日本の現代美術を代表する動向として歴史に名を残しています。

風光明媚な環境の元、華やかなりしモダンズム文化が形成された芦屋。

芸術に携わる人物たちの層の厚さが物語るように、芦屋の地が文化発展の場所として重要であったことを教えてください。

(おおつきあきみ 芦屋市立美術館学芸員)